

環

(あい)

光耀抄	2
琥珀集	6
瑠璃集	15
瑪瑙集	28
紅玉集	30
俳誌交歓	31
2月号月評	32
惠贈句集拝見(55)	34
惠贈俳誌拝見(25)	36
特別作品「秋の安曇野・上高地」	38
琥珀集作品鑑賞	40
瑠璃集作品鑑賞Ⅰ	41
瑠璃集作品鑑賞Ⅱ	42
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞	43
句集「粥の味」共鳴句Ⅲ	46
他誌転載	48
娘の国父の蒼天(47)	50
詩仙堂吟行記	52
エッセイ「冬のはじめに」	54

今月の一句

極まりし離愁を門に卒業子

桂樟蹊子

(昭和六十二年作)

昭和四十七年三月の停年までの二十七年余り、師は京都府立大学にて教鞭を執っておられた。そして停年後も引き続き京都府立大学名誉教授として、入学式や卒業式にも参加されていた。その時、大学の正門を撫でながら号泣している卒業生を目にされた。師も同じく「極まりし」の想いでその卒業生を見詰めておられたに相違いない。

隆子

荒大根

塩路隆子

雪起し子盗ろ子盗ろとひびきけり

妣の辺はいつも炭火と和裁鋺

年の暮地球自転を速めける

寒波来るベッドメイクを丹念に

低唱の小学唱歌開戦忌

かまど神へ男体女体の荒大根

枯るる中巨石ごろりと石舞台

二月号光耀抄

塩路 隆子選

北風そろそろ湖は不機嫌に
側室に挺摺つてをり老菊師
その昔父とまるめし豆炭團
役終へしねんね今は深ねむり
白鳥のために水張る田一枚
有馬皇子の悲運伝ふる山眠り
筋書きの通りのドラマ雪の夜
襖絵のかすれに力冬日影
名を呼べば上目遣ひのかじけ猫
できたての海に譬ふる葛湯かな
八ッ橋の老舗の籬菊紅葉
霜の夜の残月掲げ大銀杏
子の語る宇宙の不思議息白く
定番の紅葉天ぷら寒禽来
枯葉音落城兵の声に似て
日銀や銀杏落葉の黄金色
幸せの真っ赤を買ひぬポインセチア

竹内 悦子
阪本 哲弘
笠井 清佑
田下 宮子
和田森 早苗
山口キミコ
国包 澄子
石川 かおり
宮田 香
吉田 希望
川崎 利子
宮崎左 智子
鈴木 照子
坂上 香菜
伊藤 和子
伊藤 純子
小澤 菜美

土積みて土つみて葱育てをり
 冬霧が見知らぬ町に塗り替へる
 時雨るるや背に笠負うて陶狸
 大壺の菊の品格嵯峨御流
 それぞれに十二月のドア開けられる
 人気なき湖北しぐれの鯖街道
 時雨るるやミシガン遅々と北を指し
 大書院を映す水面や薄紅葉
 童らに風は手品師舞ふ黄葉
 柚子浮かべ電子音「風呂沸きました」
 呼び声に熊手買ひけり酉の市
 大紅葉のこれぞ絶景金剛院
 我が庵はむかし御狩場笹子鳴く
 仏訓の墨書看板秋の寺
 ヒマラヤの塩や湯気立つ茹卵
 湘南の水平線や雪の富士
 銀杏黄葉暮色の村に点りける
 のっぺ汁供する津和野旅人宿
 冬近き水の重さに触れにけり
 インディアンの安産飾り秋土産

坂根 宏子
 佐用 圭子
 塩路 五郎
 田中 浅子
 辻 香秀
 辻 知代子
 中川 すみ子
 長濱 順子
 中村 ふく子
 中本 吉信
 西田 史郎
 能勢 栄子
 橋本 靖子
 藤本 秀機
 森下 康子
 前川 ユキ子
 栗倉 昌子
 大越 義雄
 大島 みよし
 谷口 俊郎

つぎはぎの選挙公約師走かな
 凍星やダイヤモンドを買ひに行く
 雁行やいづれ劣らぬ加速つけ
 薄れゆく昭和戦史や冬茜
 わたしとて貴婦人ボジョレヌーボー買ふ
 北風を美山の母の声と聞き
 干し蛸の日向ぼっこや瀬戸の海
 茶の里はころ柿の里鈴成りに
 うそうそと潜む寒さや武者隠
 人疲れ気疲れしたる菊を焚く
 月光もすべり込ませて投函す
 窓温きひと日銀杏の黄落す
 公爵の愛でたる屋敷木の葉舞ふ
 蕪蒸母とのんびり昼御膳
 銭太鼓ひびける夜のみぞれかな
 里山の日暮の早き灯を点し
 顔見世の幕すると開き「中村屋」
 顔見世や口上若き勘九郎
 冬晴の鳶あでやかに京の里
 藪中の恋乱すまじ笹子鳴く

北尾 章郎
 常田 創
 秦 和子
 藤見佳楠子
 松岡 和子
 山崎 里美
 松田 和子
 池田加寿子
 伊東 和子
 笹井 康夫
 杉本 綾
 津田 富司
 福本すみ子
 増田 一代
 松田 洋子
 三川美代子
 森田 利和
 山口 和子
 山本 孝夫
 山本 丈夫

雲間より日矢の一条秋の湖
恙なく五感でめめる今年米

マフラーをふんはり小猫抱くやうに

落葉掃く「よう御参り」の憎清し

冬の雨墨絵のごとく雲垂るる

煌々と豪華客船日の短か

冷まじき風吹きぬけて賤ヶ岳

紅葉季人待ち顔の道祖神

満月と気付けり露天湯に浸り

しみじみと聞く追分や冬に入り

当る夢の話歳末宝くじ

ちゃんちゃんこほいほいと来て孫自慢

奔放な石露の咲きけり水軍址

黄葉の王者は銀杏燦然と

うるはしき天皇の書や文化の日

朱色濃き鴛鴦浮かぶあで姿

夫の射る弓の的先冬の虹

粉雪舞ふ水面に映る金閣寺

クラス会馳走の締めのみかご飯

白檀の千体地藏秋日差

行く秋や谷に古りたる発電所

横田 矩子

吉田 宏之

和田 郁子

渡部 法子

飯田 美千子

井口 淳子

板倉 安正

稲田 和子

伊庭 玲子

大松 一枝

大堀 賢二

落合 晃

片岡 久美子

桂 敦子

北田 敏子

小林 久子

西郷 慶子

鷺見たえ子

十時 和子

西垣 順子

中井 登喜子

琥珀集

老菊師

阪本 哲弘

被災地の移動図書館文化の日

風立ちて炎と化せり紅葉山

出棺に昂る詩吟秋風裡

南洲や紅葉且つ散る田原坂

側室に挺摺つてをり老菊師

妻に注ぐワイン勤労感謝の日

名乗らるる懐しき佳句や秋の声（悼 小林成子氏）

鴛鴦

竹内 悦子

ちゃんちゃんこ

笠井 清佑

茶の花や間の土山雨となる

錦秋の山の名知らず鈴鹿越

枝打の枝落ちてくる鯖の道

亥の子餅配られてをり農知らず

年の暮今年も届く年貢料

浜町は昔みづうみ鴛鴦来

北風そろそろ湖は不機嫌に

事始舞妓の帯の華やかに

到来の下仁田葱の泥拭ふ

ちゃんちゃんこ媪の手による温さかな

座布団に温みの残る冬座敷

その昔父とまるめし豆炭團

冬籠本とパソコンあれば好し

ジヨギングの見え隠れする枯野かな

冬薔薇

田下 宮子

田道間守

山口キミコ

冬薔薇床踏み鳴らすフラメンコ

役終へしねんね今は深ねむり

回覧に放火魔注意師走月

焼箸を父へと抱きて娘の戻る

破蓮のスリラーダンス風の夜

チャイム音に手櫛を通す木の葉髪

吊橋を渡る怖さや初時雨

暮早し

和田森早苗

大根焚

国包 澄子

長き髪きりりと纏め師走妻

舞降りてスワン憩へる刈田跡

白鳥のために水張る田一枚

白鳥の田圃となれり暫くは

体内時計の狂ひ少々暮早し

挽ぐときの香りそのまま柚子の風呂

蓄熱式のゆたんぼ抱いて猫抱いて

花と紛ふ袋みかんや山の景

蜜柑山登れば峠御幸芝

有馬皇子の悲運伝ふる山眠り

紀伊の里みかん祖神の田道間守たじまもり

勲章の意匠の縁実橘

茶の花の明恵上人御廟かな

鎮もりしガラシヤの墓の実千両

溪谷の底も一景散紅葉

勘亭流まねきに冬の京四条

太根焚一会の席を譲り合ひ

鈴の緒の湿り諸手に寒詣

みちのくの復興遅々と冬深む

北風吹いて童話のやうに衿合はず

筋書きの通りのドラマ雪の夜

顔見世

石川かおり

葛湯

吉田 希望

軒下のラインダンスや干大根

襖絵のかすれに力冬日影

傍らに旅の本積み冬籠

煎茶席の軸にとけこむ枇杷の花

顔見世の口上天へ届きけり

左手のりハビリ開始毛糸編む

黙々と葱を刻みて返事せず

湯豆腐

宮田

香

京都にて

川崎

利子

樹々枯れてサナトリウムに溢るる陽

前髪を乱す木枯朝の道

湯豆腐や土鍋の底の罅模様

暁の路地に颯のあどけなき

火酒ウヰョウカに酔うて沈没エピローグ

名を呼べば上目遣ひにかじけ猫

色変へぬ松迫り出せる能舞台

冬ぬくしチャイムの途切れがちなる日

テレビ欄に「終」の並べる十二月

初雪の知らせ出張先より来

毛皮着る著者近影の女性かな

できたての海に譬ふる葛湯かな

人間を休んでゐたく置炬燵

歯にさはる食感まぶし蚕切干

金色の鴉尾に映えたる実橘

金箔を販ぐ店先神還る

八ッ橋の老舗の籬菊紅葉

楓紅葉に三重の塔浮き立ちて

囲ひせる菩提樹の実は枝先に

茶の花の小径下れば東山

夕映ゆる築山紅葉谷の御所

霜の夜

宮崎左智子

茶の花の白きは佗し日のかげり
妣の齢を生きて師走のなんだ坂
すきま風まちがひ電話の一度きり
雲厚し駅西口を冬の人
北風や尼僧の耳のうひうひし
馥郁と新酒ゆたかや酒林
霜の夜の残月掲げ大銀杏

宇宙の不思議

鈴木 照子

^{ふたかみ}二上山の冬日つれなし単線路
冬紅葉添へて南朝ゆかり膳
少女ドラママーへ止まぬ喝采冬温き
冬薔薇の溢るる壺やイタリアン
聖夜劇ほうきダンスのサンバ曲
子の語る宇宙の不思議息白く
肩たたき券貰ふ勤労感謝の日

イブの夜

坂上 香菜

寒うらら杉玉青き長寿蔵（伊丹）
障子明り昼餉の締めは芋の飯
照焼の鶏で充分イブの夜
紅葉茶屋古き眞面の写真展
法螺ひびき紅葉時雨の龍安寺
琵琶を持つ妙音天や冬の薔薇
定番の紅葉天ぶら寒禽来

枯葉音

伊藤 和子

枯葉音落城兵の声に似て
湯気の中大根ほぼぼる寺の庭
舟泊り翁旅地の冬かもめ
枯芒そのままにせる古駅舎
散紅葉はらりと肩に芭蕉像
避寒せる水鳥群れるピオトープ
時雨きてすだ椎の幹傘にせむ

瑠璃集

師走

北尾章郎

つぎはぎの選挙公約師走かな
池の面に泡をぼつりと冬の鯉
柿落葉模様競うて寺の磴
残照の明るさ留め枯尾花
今生へ舞練り広げ落葉風

(飛鳥・吉野四句)

初霜

大島みよし

探梅

常田 創

初霜や西郷像の犬の背に
初霜や自転車ペタル音重く
小春日の山河哀しや汚染の地
粕汁の煮立つ大鍋子等の笑
冬近き水の重さに触れにけり

生前の煙草の香り冬の墓
風邪の日の授業を一つ了へにけり
凍星やダイヤモンドを買ひに行く
枯サボテン象牙色なる針の先
探梅や鉄の扉を開く音

ロサンゼルス・秋

谷口 俊郎

京水菜

秦 和子

異国やな椰子の並木の秋高く
深秋や街路樹すべて実を抱き
爽やかや栗鼠駆け上る椰子葉蔭
嫁ぎたる娘も庭飾るハローウィン
インディアンの安産飾り秋土産
(グランドキャニオンにて)

生姜の湯冷えしからだを温める
雁行やいづれ劣らぬ加速つけ
千歳飴引きずりくぐる太鳥居
霜重ね鍋にやさしき京水菜
こも巻の始まる松や冬立てる

二月月号評

塩路 隆子

北風そろそろ湖は不機嫌に

竹内 悦子

作者が天津にお住まいであることは会員すべて周知と思われるが、琵琶湖周辺の句を詠まれると抜群の強さを持たれる作者である。北風は比良山からの冷たい風であろう。また季語にもある涅槃のころの強風は、比良八荒となづけられ琵琶湖は大荒れになる。湖畔に住む人達は、この風が吹き始めると琵琶湖は荒れ始めることを知っている。「そろそろ湖は不機嫌に」はそれを踏まえての表現であるところが秀句の所以である。いい作品を残された。

側室に挺摺つてをり老菊師

阪本 哲弘

作者は長年の腰痛のために句会に属しながらも出席の願いは叶えられずに過ごされているが、毎月期日にはいい作品をつくし句会に投句されている。この作品ももちろん、老練の味を発揮された句である。正室に対して側室があるのだが、辞書には貴人のそばめ、または妾とある

から例外もあるが「挺摺っている」の措辞がふさわしい。老菊師はまるで城中を取り仕切る老役職が、側室に手を焼いている姿が彷彿として面白い句に仕上がっている。中七が作者ならではの抜群の表現であることを付したい。

その昔父とまるめし豆炭團

笠井 清佑

この作者もよく月評に登場する作者である。「その昔」とあるから作者の子供の頃の話を、お孫さんに話されているのかもしれない。炭團といえば、木炭や石灰の粉にふのりを加えて練り、丸く固めて乾燥させたものであり火持ちが良く、火鉢や炬燵に愛用されていた燃料である。豆炭團との措辞に、真っ黒になった小さい手で丸められた炭團はお父様のそれよりも小ぶりだったことが想像されて楽しい。冬期になるとお父上とのある日を懐かしんでおられる作者が見える。ほのぼのとしたいい作品である。

役終へしねんねこ今は深ねむり

田下 宮子

ねんねこ半纏が正しい名称であり赤ん坊を背負うときに着る綿入れの半纏である。筆者も長子が生まれたとき、産着やねんねこを揃えて父が持参してくれたことを思い

出す。その「ねんねこ」もいまはお蔵入り、死語に近い。子供の成長もあるが、もう使わなくなったねんねこを懐かしむ作者の下五の「深ねむり」の連想の中に、ほっぺを真っ赤にした赤ん坊が母の背の温かさのなかで眠っている様子が浮かび懐かしい。

(以下略)

